

[日時]

2019年1月11日(金)

[司会・進行]

栗山尚子(准教授)

[担当学生]

井上堯大 具志堅美菜子 田中里奈 穴井万智 越智誠 桂麟太郎
菊池文江 小瀧航 高濱遼太郎 (M1) 力武真由 (B3)

神戸建築学 第43回

「新しいタイポロジーへ」

曾野 正之 建築家 / Clouds AO設立パートナー

講演概要

「タイポロジー」という視点から考えることが、設計が行き詰った時のブレイクスルーというか。それまで思ってもなかった解決方法が、出てくる場合が多くて。」曾野氏はテーマについてはじめにそう語った。「タイポロジー (typology)」とは、直訳すると「類型」。つまり、いくつかのものに共通する性質や型、また、決まりきった形、典型である。建築でいうと、こういう用途の建物にはこういう形、といったプロトタイプのようなものと理解していいだろう。新しいタイポロジーから考える設計プロセス。講演では代表的な3つのプロジェクトについて、その設計プロセスを紹介していただいた。

1つ目はニューヨークにあるスタッテン島の9.11メモリアル。2004年竣工、アメリカ建築家協会公共建築賞を受賞した作品である。過去のメモリアル作品にはアーチやドームで包むような形、あるいは墓標を想起させるような配置や構成が多かった。これを曾野氏は逆にして、むしろ空と海に向かって開いていくデザインを提案した。これは、メモリアルとして守るべきものが、外にあるように感じていたからだという。突然に日常を奪われたがために未だそこに漂っている死者の意識。メモリアルはその思いを送ったり受け取ったりするための空間、というイメージから外に開くような構成が出てきたという。ハガキを象った形は角度や時間によって違って見えるようにデザインされており、それによって見る人の気持ちがいまも変わるようにと意図されている。一筆書きの横顔はレリーフではなく平らな石で、そこに見る人の感

情や思い出を投影するスクリーンの役割を果たす。亡くなった人に思いを馳せ、亡くなった人からメッセージを受けとるという体験が、デザインの細部にわたっても、意識されている。

2つ目は2015年のコンペ案「Mars Ice House」、火星に建つ氷の家である。機械や核シェルターのような狭くて光の入らない宇宙建築の「あたりまえ」を覆す、半透明の美しい幾何学の家は、1枚のイメージ画からスタートした。ドラマチックなランドスケープ、薄い大気作り出す光、そういった火星の風景の中で、地球にいる時のように過ごしてほしい。そのために日本やアメリカで家を建てるような、いつもの価値観で設計しようと考えたという。リサーチの結果たどり着いた氷という素材は、宇宙線・火星にある素材・気温といった条件をクリアし、自然光が入って眺めも良く、しかも美しい。ただひとつ、昇華して消えてしまうという問題があった。これを解決したのは宇宙建築のタイポロジーだったという。宇宙建築では、外側に宇宙線を遮るシールド、内側に膜構造で空間を作る、という構成になっている。曾野氏はこれを逆にして、外側に氷の昇華を防ぐための膜構造を、内側にシールドの役割も果たす氷で居住空間を作るという構成で、透明な宇宙建築を可能にした。

3つ目は「Avatar X」という2019年大分県に作られる宇宙空間実証フィールドの計画である。地球にいるのに宇宙を感じさせるという条件に対して曾野氏は、宇宙建築のタイポロジーを逆輸入する、というアイデアを提案した。宇宙のエネルギーを象徴する



曾野 正之 | Masayuki Sono

建築家/Clouds AO 設立パートナー

神戸大学及びワシントン大学にて建築修士号取得。都市スケールの文化施設からパブリック・アートのデザインに及ぶ多様なプロジェクトに携わる。ニューヨーク・スタッテン・アイランド9.11メモリアル国際コンペ優勝作品によるアメリカ建築家協会公共建築賞をはじめ受賞多数。2013年ニューヨーク プラット・インスティテュート美術大学建築学部客員教授。デンマーク王立芸術アカデミー、東京大学建築学科などにてレクチャー。ヴェニス・ビエンナーレ フューチャー・バス、ニューヨーク近代美術館PS1、上海現代美術館などで作品を発表。兵庫県出身。少年期をニューヨークにて過ごす。

ともいえるクレーター生成過程に着想を得たり、円錐などの純粋幾何学というポキャブラリーによって構成する。宇宙開発におけるエレメントとして、膜構造や無重力空間におけるテンション構造を用いる。つまり、人間が宇宙へ行くための技術や、その設計思想を逆に、地球上に適用したという。また、これは宇宙開発が地球に貢献しているというジェスチャーとしても表現できると考えたという。

タイポロジーという考え方は、フレキシブルで強い、と曾野氏は語る。一種の新しいプロトタイプとして提案するから、いろいろな変更に対応できる柔軟さと、それでもコンセプトだけは残っていく強さがあるという。だから、タイポロジーという視点から新しい提案をしたい。そのために大事にしているのは、子どもっぽかったり突飛だったり、見せるのも恥ずかしいような馬鹿馬鹿しいアイデアなのだという。3つのプロジェクトもはじまりは全部くだらないアイデアで、だからこそ普段見過ごされている良いアイデアが隠れていたのだ。「だから、自由な発想やアイデアをこわがらないでほしい」と学生へのメッセージで締めくくった。

事前学習でレジュメを作成するにあたり、わたしたちは曾野さんが手がけた作品のスケールの幅広さに注目した。街の一角にある本屋の内装から、火星の上に建つシェルター。人の感情に訴えかける（機能のない）モニュメントから、最先端の科学技術を扱う機能的な施設。とても一人の人が考えているとは思えない仕事の幅だというのが事前学習を経ての正直な印象だった。

「モノとしてよりも、体験としてデザインしているから、スケールはあまり関係ない。」事前学習からの疑問に答えたこの言葉が、わたしは一番印象に残った。本屋と火星とを結びつける、曾野さんの設計の本質があるような気がしたからだ。屋は実地の設計で夜は宇宙建築と、全然違うことをしている中で相互にフィードバックがあると話されたが、それは技術や手法のことだけでは



ないだろうと思う。火星の上にある建物でも、中で過ごすのはわたしたちと同じ感覚を持った人間である。そういう想像力が、普段の設計と自由なアイデアを地続きにさせているのではないだろうか。

紹介された3つのプロジェクトに代表されるように、曾野さんの作品には驚くようなアイデアのプロジェクトや見たこともない造形の建築がある。しかし、そのプロセスを紐解けば、中心には人間がいて「人にとって気持ちのいい空間」という建築にとって本質的なものに対して誠実にデザインされているように感じた。自由なだけの発想はともすれば荒唐無稽な「形無し（かたなし）」に陥ってしまう。だから恐れもするし、くだらないと捨ててしまう。人にとって気持ちのいい空間というあたりまえの地続きに、見たこともない「型破り」なことができれば、そんな可能性の最大限を見せてもらったように感じた。

最後に「新しいタイポロジーへ」というテーマを振り返ってみたい。建築に限らず、新しいアイデアは時代を追って次々と生まれ続けている。しかし同時に、消え続けてもいる。「タイポロジー」つまりプロトタイプに、やがてなくなっていくだけの普遍性を曾野さんの設計が持つのだとすれば、「体験としてのデザイン」というコンセプトにあるのではないかと感じた。（穴井万智）

